



山口県ゆかりの人物等研究支援事業

幕末長州藩における 海事志向の伝播

～近代造船の先駆者・渡辺蕎蔵の 人生から照射する～

牛見 真博

はじめに(先行研究)

1頁

・志士→造船分野へ転じた理由(回想)

私は高杉、久坂其他の人の様な働きは出来ぬ、愚痴であつた。併し松陰先生が今後の日本は大いに造船、造艦の術を起して、航海遠略の基を立てねばならぬと話して居られた故、船大工なら私にも出来ようと思つて、慶応三年ロンドンに渡つた。これが船に関することに身を致すに至つた所以である。

はじめに(先行研究)

1頁

- ・金子久一編『松陰門下の最後の生存者渡辺翁を語る：昭和15年3月7日渡辺翁追憶座談会速記録』（萩響海館、1940年）
- ・海原徹『松下村塾の人びと』（ミネルヴァ書房、1993年）
- ・海原徹『松下村塾の明治維新』（ミネルヴァ書房、1999年）

※断片的 前後関係・因果関係は不明瞭



はじめに(論文構成)

- 1 松下村塾時代
- 2 吉田松陰の海事意識
- 3 藩内の海事及び英学志向をめぐって
- 4 海外留学に至る経緯
- 5 留学時代
- 6 長崎造船所時代

1 松下村塾時代(天野清三郎) 2-5頁

- 15歳で入門

→ 吉田松陰の期待大

※「立志」「実行」の訓え

2 吉田松陰の海事意識(黒船来航前)

5頁

- ・嘉永3年(1850)長崎へ

→葉山佐内の影響

※「小船」が戦闘上優位？

- ・嘉永4年(1851)江戸へ

→佐久間象山に入門

※洋学への開眼、海外認識の変化と限界

2 吉田松陰の海事意識(黒船来航後)

6-8頁

- ・黒船来航

危機感→外国への興味関心

- ・攘夷に対する意識変革

理論→実学志向

- ・海事教育の必要性

大学校構想→航海学科設置+航海実習

【10～20代若者】

3 藩内の海事及び英学志向

8-10頁

- ・長州藩初の洋式船「丙辰丸」 安政4年(1857)
- 藩最初の江戸航海 万延元年(1860)
(艦長:松島剛蔵、高杉晋作・天野清三郎^{18歳}も同乗)

【航路】

萩～下関海峡～瀬戸内～紀州灘
～遠州灘～品川(約60日)

3 藩内の海事及び英学志向

10-11頁

万延元年以降の海外留学者の一例

【目的：航海術または海軍修業】

- ・北条源蔵：幕府第1回遣米使節随行
- ・桂右衛門：露領アムール地方視察
- ・山尾庸三：同上
- ・杉徳輔（孫七郎）：幕府遣欧使節随行
- ・長州ファイブ：英国密航

3 藩内の海事及び英学志向

11-13頁

- ・久坂玄瑞：西洋学所舎長 安政6年～

「軍艦運用」「艦砲」「運転術」「軍艦大略」

「海域大観」・・・『九仞日記』より 久坂による感化

→江戸での英学修業 万延元年～

※最も気に掛けるべき国はイギリス

(松下村塾門下への手紙より)

- ・杉徳輔(幕府遣欧使節)→晋作父への手紙

※イギリスの強大さを指摘

4 海外留学に至る経緯

13-14頁

先輩同志：高杉晋作・久坂玄瑞と行動

- 「奇兵隊稽古掛」を拝命 文久3年(1863)

→その後、「勅使」の護衛係 21歳

- 禁門の変(蛤御門の変) 元治元年(1864)

→久坂玄瑞ら戦死

- 四国連合艦隊報復攻撃 同上

※藩内の海軍艦船の喪失 22歳

4 海外留学に至る経緯

14-16頁

・天野清三郎「博習堂」(西洋学所)入所 22歳

→長州藩洋学の拠点

→村田蔵六(大村益次郎)により、

先進的な西洋兵学教育機関へ発展した時期

※天野は「英学」と「海事」を学ぶ

→後に大村の推薦で「三田尻海軍学校」へ

4 海外留学に至る経緯

16-17頁

・「博習堂」から「三田尻海軍兵学校」へ

※陸上・海上・英学に通じた人材（藩の期待）

※イギリスへの留学を熱望（木戸の後押し） 25歳

5 留学時代 17-20頁

- ・ロンドン大学ユニバーシティカレッジ
- ・ネイピア造船所(グラスゴー)
→「エンジン」から「船体」まで製作

※山尾庸三の存在(長州ファイブ)

6 長崎造船所時代(着任前の状況)

- ・安政4年(1857)

- 幕府: 反射炉・溶鋼炉の建設(長崎製鉄所)

- ・明治4年(1871)

- 新政府: 工部省長崎造船所として移管

- ・明治6年(1873)

- 伊藤博文: 初代工部卿(大臣)就任

※船舶・機械製造所の確立は、国家の最重要事業

※先端の知識・技術を持つ現場責任者が不可欠

6 長崎造船所時代

20-21頁

- ・明治6年末～7年
→帰国し、工部省入省(山尾庸三の勧め)
- ・明治7年(1874)
→長崎造船所第2代所長
- ・明治12年(1879)
→立神第一ドック(東洋一)
- ・明治16年(1883)
→小菅丸(1496トン)

6 長崎造船所時代

21頁

- ・明治15年(1882)以降

- デフレ政策の余波による不況

- +過度な設備投資+原価管理体制の不備

- ・明治17年(1884)

- 岩崎弥太郎:「郵便汽船三菱会社」に貸与
(現在の「三菱重工長崎造船所」の前身)

おわりに

21-22頁

・幕末長州藩における海事志向の伝播

吉田松陰・桂小五郎・高杉晋作
大村益次郎・長州ファイブ...



※渡辺蕎蔵の人生に多大な影響
→日本の近代造船業確立に大きな足跡